

皆さんは、田植えをしたことがおありでしょうか。私は高校の頃まで、田植えを手伝ったことがありました。6月の雨がよく降る頃に、水をはった田んぼに、苗代でできた苗の束を手に持ち、3本ずつぐらい植えてゆきます。ところが、コメの苗に混じって、ヒエの苗が入っていて、もしそれを見つけたら、それは取り除いて、植えないように、というふうに教えられました。根の近くが、稲のものより、白っぽくて、ちょっと大きいので気をつけるように、指示されたと思います。

数人が一線に並んで、紐に等間隔でつけられた印の所に植えていくのですが、子どもの私はついてゆくのがやっとで、なかなかヒエの苗を見分けることができませんでした。そして、その後、暑い夏が来て、夏休みの途中だったでしょうか。「ヒエを抜きに行こう。」と促されて、麦わら帽子をかぶって、出かけました。稲の穂が出てきた頃、ところどころ、稲より少し大きくて、明らかに違うものが育っているのがわかりました。田植えの時、取り損ねて、稲の苗と一緒に植えた、ヒエだったのです。

こんな経験があるものですから、今日の毒麦の話はわかるような気がします。聖書に出てくる毒麦も、穂が出るとわかるのですが、それを食べると、嘔吐、下痢、めまいなどを起こす、困ったもので、収穫の時には、明らかにわかるので、それは、燃える火に入れて、焼き捨てるしかないようです。その点、日本のヒエは、食用になるのですが、コメ作りをする者にとっては、じゃまなものなのでしょう。

ところで、今日の話は、前半は、イエス様が群衆に向かって話されたたとえ話です。麦の中に、毒麦がはいっているのがわかり、僕たちが、毒麦を抜こうとするのを、主人が止めます。それは、あの人はいい人、あの人は悪い人、という判断とか評価を後回しにすること、忍耐を教えているように思えます。

一方、後半は、群衆が去った後、弟子たちがたとえの説明をイエス様に求め、イエス様がそれを解説する、というお話です。ここでは、毒麦である悪い者の子らが、燃え盛る炉の中に入れられる、恐ろしい話になっています。前半の、忍耐強い主人である神様についての話と、対照的で、どうも素直に受け入れられない気がします。

ここで、以前に紹介したことがあるかと思いますが、ファイブゴスペルズという本があります。日本語に直せば5つの福音書という名前です。聖書には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書しかないのですが、1945年に発見されたトマスによる福音書というのが、歴史的に重要だ、ということで新約聖書の研究者たちは5つの福音書を並べて研究しているようです。もっとも、そのほかにも、聖書に入らなかった福音書は、それこそユダの福音書などもあるわけですから、まあそれはいいとして、

現代の新約聖書の研究者たちが、「イエス様は、何を本当に言ったのか？」という研究の成果を持ち寄り、「この言葉はイエス様が本当に言ったこと」それには、赤。「このとおりでないだろうけど、似たような言葉を言われただろう」というのにはピンク。「この言葉には、何となくイエス様の匂いがする」というのには灰色。そして「これはイエス様が言ったのではなく、後の時代に、教会の人々が作ったものだ。」というのには、黒の玉を入れて、結局イエス様のことばを4種類に色分けしたのです。

この投票が絶対的だ、とは言えませんが、これらの学者さんたちの研究の成果は、ある程度尊重して、わたしたちがどんなイエス様を心に描いたらいいか、考えるのに大変参考になると思います。

すると、一番古い福音書と言われる、マルコによる福音書で、本当にイエス様が言われた、と判断できるのは、一箇所だけでした。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」（１２：１７）

ですから、このマタイによる福音書でも、そんなに高い評価の言葉は少ないのです。

そのファイブゴスペルズでは、今日の福音書は、後半は全くイエス様の言葉ではなく、初代の教会で、その妨害をする人々が登場してきたことを背景にできた言葉だと言われています。しかし、前半の、毒麦を抜くのを止めて、忍耐して待つお話は、後半よりもイエス様の匂いがする、と評価されているものです。

今日の福音書の後半で、世の終わりの裁きについてが、恐ろしい、燃え盛る炉の中で、悪い者が焼き殺されるのは、これは初代教会でクリスチャンに対する迫害の苦しさから、そんなクリスチャンを励ますために出たものだろうと思います。しかし、そのような時代にやはり書かれたと思われる、ペトロの手紙は、今日の前半の、毒麦を抜き取らない主人のような、神様の忍耐ということを語っています。イエス様が再び来られる、世の終わり、というのがなかなかやってこないことについて、この手紙は、神様が耐えておられる、と教えるのです。

ペトロの手紙二 ３章３節の途中からですが、

『終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけって、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」彼らがそのように言うのは、次のことを認めようとしないからです。すなわち、天は大昔から存在し、地は神の言葉によって水を元として、また水によってできたのですが、当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。』（Ⅱペトロ３：３～９）

神様によって造られた世は、昔はノアの洪水によって滅ぼされたけど、現在は、火によって滅ぼされようとしている。しかし、神様は悔い改める人々を待って、忍耐しておられるのだ、ということでしょう。

今日の毒麦のお話は、教会をはじめ、たくさんの集団の中には、「麦」のようないい人もいれば、「毒麦」のような悪い人もいます。それを私たちが、「あの人はいい人」「あの人は悪い人」というふうに、勝手にレッテル貼りをしてはいけません。それを決めるのは、刈り入れの時にあたる、世の終わりに神様が判断されることであって、私たちが先走って判断してはいけません、という話でした。

毒麦は、よい麦に変わることはないが、人間は、誰にだって回心して、悪人が良い人になるチャンスがあるんだ、と言うより、クリスチャンはみんな罪人なのに、イエス様の十字架によって救われたのだから、他の人を、自分が神様のようになったつもりで、裁いてはいけない、ということなのでしょう。

わたしたちは、自分と気の合う人とだけ生活するわけではありません。「あの人さえいなければ」などと考えることもあります。しかし、神様が忍耐づよく待たれたように、わたしたちも忍耐づよく待つ必要があるように思います。

往々にして、私たちが「あの人さえいなければ」と思っている時、相手も同じように考えていることが多く、それについて、私たちは時間をおいて、冷静に、自分を客観的に見る作業も必要ではないでしょうか。